日小整会誌（J Jpn Ped Orthop Ass）21(2)：256-257, 2012.
第22回日本小児整形外科学会学術集会　主題

歩行開始後に診断された先天性股関節脱臼の治療成績2

座長：三　谷　　茂

長崎医療センターの岡野らは歩行開始後の先天性股関節脱臼に対するLudoloff法の長期成績について検討し，Severin Ⅰ，Ⅱ群となった成績良好例は16%に過ぎないと報告した．この結果から歩行開始後の症例に対するLudoloff法は禁忌と述べていたが，これにはさすがに言葉が強すぎるとの意見がなされた．しかしながら他家の報告も踏まえて，この年代ではLudoloff法の適応には慎重とならざるを得ず，骨盤骨切り術等の追加手術とセットで考えるか，他の観血的整復術を選択するほうがよいと筆者も考えている．

水野記念病院の貴志らは歩行開始後の先天性股関節脱臼に対して徒手整復，開排位持続牽引法，観血整復により加療を行い，その成績について報告した．4歳以下の症例では約80%の症例が保存的に対応できていたが，そのすべてで補正手術を要していた．4歳以上では観血整復の割合が高くなったと報告した．3つの整復を具体的にどのように選択するかについての言及はなく，筆者としては少々残念であった．全体としての成績は追跡調査機関が短いために論じえないが，保存療法で対応できるのならそれが理想的であり，今後の報告が待たれる．

獨協医科大学越谷病院の垣花らは平均年齢3歳の先天性股関節脱臼に対して関節鏡視下に処置を加え，その成績について報告した．再脱臼を約20%に認め，またSalter骨盤骨切り術も30%に必要であったとしている．提示症例をみても求心位が不良な例が多く，発展途上の手技との印象であった．筆者としては大腿骨頭靱帯が主な整復障害因子ではなく，この処置については重要なポイントではないと考えている．重要なのは横靱帯の切離と関節唇の外反であり，この処置が確実にできるよう，今後の進歩が期待される．

愛媛県立子ども療育センターの佐野らは歩行開始後の先天性股関節脱臼に対して広範囲展開法による観血整復を行った症例の長期成績について検討した．Severin Ⅰ，Ⅱ群となった成績良好例は62%と，これまでの報告に比べてやや低い結果であった．年齢月に検討すると5歳未満の症例では86%が成績良好であり，それ以上の年代の成績が不良であった．すなわち広範囲展開法の年齢的限界が明らかとされた．今後この年代では何らかの追加処置を検討する必要がある．股関節の状態は様々であり，症例ごとに検討して骨盤骨切り，大腿骨内反もしくは減捻骨切りを組み合わせて行う必要があると筆者は考える．

神奈川こども医療センターの町田は3歳以上の未治療先天性股関節脱臼に対して観血整復とSalter骨盤骨切り術の合併手術の成績を報告した．その成績は全例Severin Ⅰ，Ⅱ群と良好であり，諸家の報告と同じく安定した方法と考える．今回の報告では手術時間と出血量から見ると手術侵襲がやや強い印象であった．観血的整復単独で良好な成績が得られる症例と骨盤骨切りを同時に行う

必要がある症例を，術前もしくは術中に選択できればより理想的と考える．

千葉県こども病院の西須はトリプル骨盤骨切り術の１種であるSakalouski法について報告した．現時点では成績は安定しているとは言えないが，経験値を増やしていく中で判明してきた手術を行う際の手技的なコツやpit-fallについて述べていた．寛骨臼回転骨切り術や寛骨臼移動術が普及している本邦においてトリプル骨盤骨切り術はあまり施行されておらず，筆者も含めて聴衆にとっては興味深い発表であった．